

大沢 清三（おおさわ・せいぞう）

1、プロフィール

昭和 21 年、先に桜井夢村、神勝之助、鎌田純一らが始め、休刊していた「和船」を復刊。

陸奥歌壇、東奥歌壇の選者を務めるなど県歌壇における指導者であった。

<生没>

1900(明治 33)年3月 20 日 ~ 1966(昭和 41)年9月 18 日

<代表作>

遺歌集『雄風』

<青森との関わり>

西津軽郡鱒ヶ沢町生まれ。青森県歌壇の指導者として活躍し、第1回青森県歌人賞を受賞した。

2、作家解説

作歌は「黎明」時代から淡谷悠蔵、竹内俊吉、船水公明、林証次郎、三上智成らを友人として、和田山蘭を尊敬、私淑していた。

昭和 19 年に帰京後は、桜井夢村、鎌田純一らと毎月歌会を開き、21 年に北満から引き揚げてきた三ツ谷平治を発行人として「和船」復刊に当たり、自ら編集を担当して鱒ヶ沢短歌会の中心として活躍した。24 年までつづいて「和船」は終刊するが、作歌活動は止まなかった。東奥日報と陸奥新報の歌壇で選者を担当するなど、青森県歌壇の指導者として活躍し、昭和 39 年に第1回青森県歌人賞を受賞した。

歌碑の歌

「日本海潮にけむりて磯浜に春の雄風白波を寄す」

(昭和 32 年、自宅の裏庭に建立)

ほかに代表作として

「砂山のかげに家あり黄菊咲き鶏吹かれみるさむ風の中」

(砂丘地帯一十三街道一)

「マダム・キク・ウメムラと宛名書き終へて遙けしと思ふパリの妹」

「睡蓮が咲くと言はれて壕の面に所詮は見えぬ弱視凝らしつ」

3、資料紹介

○歌集『雄風』

図書

1968(昭和43)年10月29日

182mm×28mm

昭和21年以後の作歌を中心に、昭和41年までの歌600余首を収める。氏の3回忌にあたる昭和43年10月、友人らの勧めによって三ツ谷平治が編集し、遺歌集として出版した。「雄風」とは風速3～5メートルの気象用語であるという。